追求する読み手の育成をめざして

国　語　科

1．はじめに

「国語の授業はおもしろくない」「国語の授業では何を学習したらよいかわからない」という子どもの声をよく聞く。この声に表れているように，児童の国語学習離れの傾向がいろいろなところで報告されている。また，それと同時に，学習の主体者であるべき子どもたちが，その主体性を発揮することなく受身で自ら考えようとしないという報告も同時になされている。この原因としては，子どもを受身の状態に追いこんでいる社会的事象の影響があることはいうまでもないが，かといって社会環境ばかりにその責任を押しつけることには問題がある。平素の授業の構成・指導者の授業に対する考え方などにも，もっと目を向けて，あらゆる場面で主体的に取り組む児童の育成をめざす必要がある。

本校では，昨年度より国語科における自己教育力の育成を目標として研究に取り組んできた。昨年度は，「学習のめあてを育てる国語科指導」というタイトルで，学習の基本となる学習意欲の喚起に視点をあて，児童の問題意識と指導者のねらいとをどのようにかみ合わせて，価値ある学習のめあてを設定するか，その手だてを探ってきた。その結果，めあてを児童にとらえやすくするために学習課題という具体的でわかりやすい形をとらなければならないこと，児童の問題意識を焦点化するためにひとり読みの活動を取り入れること，また，児童の読みの反応をとらえやすくするための一覧表の工夫などの方法や留意点が明らかになった。そこで本年度は，研究範囲をめあて設定から追求にまで広げ，設定されためあてを「勉強してみたい，やってみよう」という意欲を持ち，その意欲をいつまでも持続させながら追求していく読み手を育てるということについて，文学作品の読みに視点をあてて取り組むことにした。

2．追求する読み手の育成をめざして

追求する読み手の育成の基本は，読者が作品と対面し，その作品の中にながれている事象と自分の生活経験とを比較する中で，「おかしい」「どうしてだろう」という問題意識や矛盾を持たせることである。そして，その疑問や矛盾に対して「自分はこう考えているのだが」という自分の読みをつくり出させ，その読みに対してこだわりを持たせることが重要であると考える。この読みへのこだわりこそが追求するエネルギーにつながっていくのではないかと考えた。そこで，次のような研究仮説を設定した。

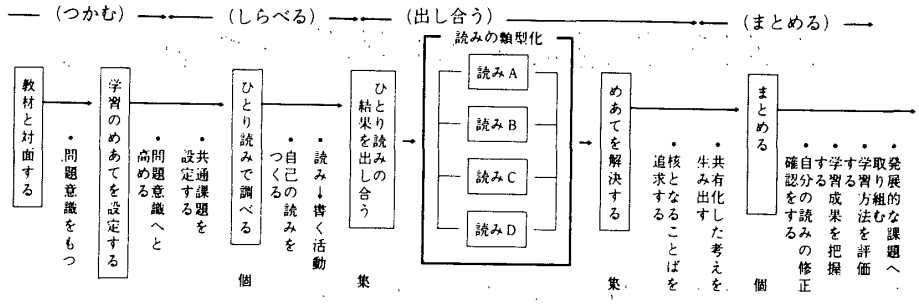
研究仮説

- めあて追求の場において，下記の手だてを取り入れれば，児童は読みへのこだわりを持ち，意欲を持って学習に取り組むであろう。
  - (1) 児童一人ひとりが全力をあげて文章にぶつかって読みひたり，読み解いていく「ひとり読み」を指導過程の中に位置づける。
  - (2) ひとり読みで出された児童の読みを分類（読みの類型化）して提示することにより，他の児童との読みの違いを意識させる場を設定する。

3．めあて追求の基本的指導過程

本校では，上記研究仮説を位置づけためあて追求の基本的指導過程を次項のように「つかむ・しらべる・出し合う・まとめる」の大きく四つに分けて設定している。

この指導過程の特長としては，(1) ひとり読みの活動を一度経験させることで「自分の読みはこ



れだ」「ここまでについてはこう考えた」ということをはっきりさせて授業に臨ませ，「学習してみよう」「調べてみたい」という意欲を起こさせることができること (2) ひとり読みで出された各自の読みを類型化して提示し，その共通点や違いを明らかにする中で自分の読みの立場をはっきりさせることができ，より深い読みへと導くことができること (3) 自分の学習成果を自分で確かめるための立ち止まり，ふり返る場をまとめの段階で設定することにより，児童に成就感や充実感を持たせることができること などをあげることができる。

この追求する過程の中で基盤としたい活動は「書く」ということである。その理由としては，

(1) 書くことは自分の考えを深め，まとめることに有効に働き，自分の考えを大切にする児童を育てることができる。

(2) 書き残すことで，自己の成長をとらえさせ成就感を持たせることができる。

(3) 書いたことを通して児童の読みの実態を的確に把握することができる。

の三点があげられ，単元の指導計画の中へ積極的に取り入れるようにしている。

4．めあて追求を支える条件

めあてを追求していく学習を成立させるためには，まず基底に学習を進めていくためのしっかりとした基盤づくりができてなければならない。その条件としては，次のようなものを考えている。

(1) 一人ひとりの考えを大切にし深めあえる学習集団づくり

ここがわからない，ここを学習したいというお互いの疑問を出し合える場があってこそ，児童は自由に多様な意見を話し合いの場に出せる。そして，お互いの考えを深めあい高めあう中で，共有する考え方や視点をつくり出していく。このように考えると開かれた学習集団をつくることは，追求する読み手を育成する上で重要なかぎとなる。

(2) 学習規律づくり

個の読みは集団の中に出されて他の者の読みと比べられることにより深まっていく。その際しっかりとした学習規律を身につけさせておくことが，より話し合いの効果を高めることにつながると考える。きちんとしたルールを身につけさせ，けじめのある中で学習は高まる。

(3) 国語科としての基礎・基本の技能を身につけさせる

めあて追求のためには，まず自力で文章に取り組むことが根本となる。また，読みとったことをノートに的確に書きとめておかなければならない。このように考えると，正確に読む力・表現する力・ことばの力などの基礎的学力や，これらの学力を使ってどのように学習を進めてつくか学習のすすめ方についての技能を十分に身につけさせることが大切である。

5．めあて追求と評価

児童に「できた・わかった」という成就感や成功感を持たせ，学習することの喜びを味わわせるような評価活動でありたい。本校では，前述したように自分の読みを書かせる活動を効果的に位置づけることによって，各自の読みの深まりを自分の手でとらえさせるようにしている。また，指導者側としては，書かれたものを通して，児童の読みの実態を的確に把握し，よりよい授業の構築に役立てるようにしている。

（檀上・丸本・本吉）